

I P M実践指標（そば）

（富山県）

管理項目	管理ポイント	点数	チェック欄(注1)		
			昨年度の実施状況	今年度の実施目標	今年度の実施状況
1 排水対策	排水性の良いほ場を選択するとともに、額縁排水と基幹排水溝を必ず設置し、排水を良くする。また、高畦ドリル播や播種後の1.5～2m間隔の排水溝の設置により、湿害を回避する。	1			
2 適正な播種と肥培管理	適正な播種量で播種するとともに適正な肥培管理を行い、過繁茂や軟弱な生育にならないようにする。	1			
3 栽培期間中の雑草の発生しにくい環境作り	作付け前のクロタリヤ等の地力増進作物のすき込みにより、土づくりとともに、雑草の発生を低減する。	1			
	砕土を丁寧に行い、苗立数の確保と初期生育を促進し、雑草の発生を抑える。	1			
	ほ場内外で難防除雑草(帰化雑草等)の早期発見に努め、ほ場侵入前や結実前の手取り除草を行い、まん延を防ぐ。	1			
6 病害虫発生予察情報の確認	病害虫防除所(農林水産総合技術センター)が発表する病害虫発生予察情報を確認する。(注2)	1			
7 病害虫防除要否の判断	ほ場内を見回り、病害虫の発生や被害を把握するとともに、気象状況等を考慮して防除の要否を判断する。	1			
8 病害虫防除対策	適用のある害虫に対して、土着天敵や訪花昆虫に影響の少ない生物農薬(BT剤等)を積極的に使用する。	1			
	ほ場周辺にハスモンヨトウ大量誘殺フェロモントラップ剤を設置する等、フェロモン剤を活用してハスモンヨトウの被害を低減する。	1			
10 農薬の使用全般	十分な薬効が得られる範囲で最小の使用量となる最適な散布方法を検討した上で、使用量・散布方法を決定する。(注3)	1			
11	農薬散布を実施する場合には、適切な飛散防止措置を講じた上で実施する。(注4)	1			
12	農薬を使用する場合には、作用機作の異なる農薬をローテーションで使用する。	1			
13 作業日誌	各農作業の実施日、病害虫・雑草の発生状況、農薬を使用した場合の農薬の名称、使用時期、使用量、散布方法等のIPMに係る栽培管理状況を作業日誌として別途記録する。	1			
合計点数					
対象IPM計			13		
<p>[参考]評価基準</p> <p>○合計点数 11点以上 :IPM実践度A (IPMの実践レベルが高い)</p> <p>○ " 8～10点 :IPM実践度B (IPMの実践レベルが中程度)</p> <p>○ " 7点以下 :IPM実践度C (IPMの実践レベルが低い)</p>					
評価結果					

注 1:チェック欄では、未実施の場合は「0」、農薬未使用等当該管理ポイントがチェックの対象外であった場合は「-」と記す。

注 2:現在、農家に提供している発生予察情報の利用を管理ポイントとし、利用したことが後でチェックできるように当該情報をファイルする等の行為を行った場合に点数を付けることができる。

注 3:推奨できる局所的散布方法としては、病害虫の発生状況に応じた農薬のスポット散布が考えられる。また、慣行的な全面散布の場合も、病害虫の発生状況に応じ散布量を節減するように努めることを管理ポイントとし、慣行的な全面散布を実施した場合には、その理由(局所施用を検討したが、・・・病の発生が広く確認されたことから全面散布をせざるを得なかった等)を作業日誌に記録することにより、確認できるようにしておくことが必要である。

注 4:散布方法別の適切な飛散(ドリフト)防止措置については、指針として散布方法別に以下のとおりとすることが適当と考えており、対象農薬の散布時にはどのような飛散防止措置を講じたかを作業日誌に記録することにより、確認できるようにしておく必要がある。このため、必要に応じて、農薬散布時の風速を確認する。

液剤の本田散布(地上防除):液剤少量散布又はドリフト低減ノズルを使用した散布を行うこと。

粉剤の本田散布:粉剤以外に適切な農薬がある場合は粉剤の使用を控え、仮に使用する場合でもDL粉剤を使用すること。